

# HB通信

編集・発行 /  
一般社団法人  
ひょうご部落解放・人権研究所



〒650-0003 神戸市中央区山本通4-22-25 兵庫人権会館2階  
TEL: 078-252-8280 FAX: 078-252-8281  
e-mail: blrhg@extra.ocn.ne.jp URL: <http://blrhg.org/>



## 所長の諏訪山だより

### セクシュアル・ハラスメント 30年、何が変わったのか

セクシュアル・ハラスメントという言葉が日本に紹介されたのは1989年であるが、その年には福岡県でセクシュアル・ハラスメントの被害を訴える日本初の民事訴訟が始まるとともに、全国各地で被害を告発する声があがった。いうまでもないが、1989年以前に日本にセクシュアル・ハラスメントの被害がなかったわけではない。上司などからの性被害に苦しむ女性は数多くいたのだが、被害者たちはそんな上司の下で働くことになった個人的な不運と、諦めていたにすぎないのだ。それがセクシュアル・ハラスメントという言葉の登場によって、自分の被害が個人的な不運などではなく、職場の問題、ひいては社会の問題であることが見えてきたのである。このように、新しい言葉の登場によって、その被害の実態が顕在化したのだ。

セクシュアル・ハラスメントという言葉の登場から30年になろうとしている2018年、あきれ返るような事態が出来た。テレビ朝日の女性記者によるセクハラ告発に対する官僚と政治家たちの対応である。

財務省の福田淳一・前事務次官のセクハラ問題をめぐり、財務省が被害女性に対して、同省の顧問弁護士に名乗り出るように求めたり、同省の矢野康治官房長が衆院財務金融委員会で「被害者が（財務省の顧問）弁護士に名乗り出ることがそんなに苦痛なのか」と答弁した。そして、麻生太郎財務相が「はめられて訴えられているんじゃないか」と発言したり、自民党の下村博文・元文部科学相が「隠しテープでとって、週刊誌に売るってこと自体がある意味で犯罪だ」と講演で述べた。さらに麻生財務相は「男の番（記者）に替えればいい」と発言したという。ペンス米副大統領は、妻以外の女性とは仕事相手でも2人で食事をしないとやっているようだが、女性をあたかもトラブルメーカーであるかのように捉えている点で、麻生財務相、下村元文科相、ペンス副大統領の三者は共通している。そして、これらの官僚や政治家たちの言動から読み取れるのは、セクシュアル・ハラスメントが被害者の人格を傷つける人権侵害にほかならないという認識がまったく欠けていることである。

この30年、官庁や企業、学校では、セクシュアル・ハラスメントに関する相談窓口の設置や被害者救済システムの確立など、セクシュアル・ハラスメント防止のための体制が整えられてきた。しかし、防止体制の整備が大きく進んでも、それを運用する組織のトップの男たちの意識が変わっていないのであれば、それこそ絵に描いた餅である。ジェンダーギャップ指数114位の国であること、納得してしまう今日この頃である。

所長 石元清英



## 沸点—ソウル・オン・ザ・ストリート—

(作者:チェ・ギョソク、翻訳:加藤直樹、発行:ころから、1700円+税)

80年代、ソウルの街には、電柱や壁、地下鉄の車内など、至る所に「<sup>カンチョフシンゴ</sup>間諜申告(スパイ申告)」のチラシやステッカーが貼られ、「北の脅威」が煽られていた。繁華街には異邦人とおぼしき人たちをねめ回すような目つきで、遠回しに眺める男たちがあちこちに潜み、空港でカメラを向けようものなら、<sup>チョンドッファン</sup>レンズを遮る手がどこからともなく表れた。わずか30年ほど前、全斗煥による軍事独裁政権下のソウルは、ヒリヒリとした空気に包まれていた。

『沸点』は、チェ・ギョソクによる韓国の漫画で、原題は“100℃”。1987年6月、韓国の学生をはじめとする民衆が、民主化を勝ち取るまでを描いた作品だ。当初は「若者たちに民主化運動の記憶を継承したい」という「6月民主抗争継承事業会」の依頼を受けて同団体のウェブサイト<sup>6月民主抗争継承事業会</sup>に公開されたが(※1)、「紙の本で読みたい」との声が多くあがり、2009年に出版された。

学生運動が盛り上がる中、大学生のヨンホは、苦勞して自分を大学に行かせてくれている両親の手前、運動に関わる先輩や後輩たちを避けていたが、80年5月に起こった光州事件(※2)について知ったことや、友人の拷問致死事件を経験することで、運動に身を投じていくようになる。

印象的なのは、デモ中に捕らわれたヨンホが、獄中で隣の独房に入れられた政治犯と語らうシーンだ。運動の終わりが見えないことに漠然とした怖れを抱くヨンホに、「先生」は静かに語りかける。

「水は100℃になれば沸騰する。あとどのくらいで沸騰するのか、温度計で測ればわかることだ。しかし、世の中の温度は測ることができない。(中略)だけどな、世の中も100℃になれば必ず沸騰する。そのことは歴史が証明している」

いつ「沸騰」するかわからない、と不安を語るヨンホ。

「オレだって分からなくなる時があるよ。だけどそのたびに思うのさ。今が99℃だ——。99℃でやめてしまったら、もったいないじゃないか」

翻訳は『九月、東京の路上で—1923年関東大震災ジェノサイドの残響』を書いた加藤直樹。2010年にこの本に出会った加藤は、2015年9月、安保法案をめぐる攻防のさ中、「民主主義って何だ!」と叫ぶ学生達のコールと、チェ・ギョソクの作品が響き合うのを感じ、「100℃」を翻訳出版するなら今だ、と思ったという。

当時の韓国の時代背景がわからないと少し読みづらいかもしれないが、一橋大学准教授クオン・ヨンソクによる解説が付されているので参考になる。また、『沸点』と同じく民主化抗争を描いた映画「1987、ある闘いの真実」が、9月から日本で公開される。映画を観る前に『沸点』を読むと、より臨場感をもって観ることができる、はず。(K)



※1 漫画は現在も公開中。ただし、韓国語。<http://www.610.or.kr/board/data/view/76>

※2 1980年5月、<sup>パクチョンヒ</sup>朴正熙大統領(当時)射殺事件以降に実権を掌握した全斗煥などの軍事政権に対する、<sup>チョルラナムドクァンジュ</sup>全羅南道光州の学生市民による民衆蜂起。デモ参加者は20万人。政府軍は市民を暴徒とみなし、空挺部隊などを投入し銃弾をあびせ、多数の犠牲者が出た。



## 本の紹介

# 『不死身の特攻兵 軍神はなぜ上官に反抗したか』

鴻上尚史著、講談社現代新書、2017年11月、880円＋税

「死ななくてもいいと思います。死ぬまで何度でも行って、爆弾を命中させます」  
1944年11月の第一回の特攻作戦から、9回の出撃。陸軍参謀に「必ず死んでこい！」と言われながら、命令に背き、生還を果たした特攻兵がいた。

戦史本など普段ほとんど読まないのに本書を手にとったのは、この帯文を見て「そんなことが可能だったのか！」と驚きをもったことが大きい。

その人の名前は佐々木友次さん。北海道出身で当時21歳。1944年11月12日に出撃した、日本陸軍航空隊の第一回特攻隊「万朶隊」の最年少の下士官パイロットだ。

佐々木さんが生きていたと知った鴻上さんは2015年、北海道に飛び、病室で5回にわたるインタビューをおこなった。

本書は、そのプロセス（「帰ってきた特攻兵」）に始まる4章で構成されている（第2章「戦争のリアル」、第3章「2015年のインタビュー」、第4章「特攻の実像」）。第2章は元陸軍従軍記者、高木俊朗さんの『陸軍特別攻撃隊』（文藝春秋、1983年）に準拠している。

万朶隊隊長に指名されたのは岩本益臣大尉。陸軍士官学校出の28歳、操縦と爆撃の名手だった。体当たり攻撃に反対だった岩本大尉は、体当たりでしか爆弾を破裂させられないように改装された特攻機を、操縦席から爆弾を投下できるよう独断で再改装した。そして、こう言う。

「このような改装を、しかも四航軍の許可を得ないでしたのは、（中略）自分の生命と技術を、最も有意義に使い生かし、できるだけ多くの敵艦を沈めたいからだ」「こんな飛行機や戦術を考えたやつは、航空本部か参謀本部か知らんが、航空の実際を知らないか、よくよく思慮の足らんやつだ」「出撃しても、爆弾を命中させて帰ってこい」

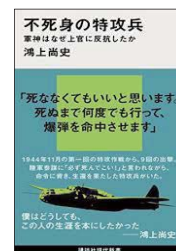
その岩本大尉は特攻出撃前、激励の宴会というくだらない理由のために司令官に呼び出され、移動飛行中に米軍機に襲われ戦死した。その無念を思いながら生還し続けた佐々木さんだが、2度も戦死が発表され、故郷でも葬式が行なわれている。そして、「（次は）必ず死んでこい」と出撃命令を出され続けた。また戦後、収容所で再会した記者から、軍が自分の銃殺命令を出していたことを聞く。大本営発表で死んだ者が生きていては困るから、と。

本書は、こうした佐々木さんの物語と証言を通し、「命令を受けた側」から特攻隊の実態をわかりやすく教えてくれる「入門書」である。同時に、「“いのち”を消費する日本型組織に立ち向かうには」と帯にあるように、「今」を生きる私たちにも大きな示唆を与えてくれるものになっていると思う。

ところで先日、本書が紹介されている雑誌『SAPIO』の広告を見かけた。「祖国のために戦い抜いた凄い男たちがいた！不死身の日本軍人は語る」というタイトルの記事の一つだったので、「そんな本じゃないのにな」と思いながら、中身を確認できないままになっていたが、それについて鴻上さんが「日刊SPA！」（「週刊SPA!」のニュースサイト）に書いていた。

「取材を受けたのは、じつは、その雑誌が右翼的な人達が好む内容のものだから、という理由が大きいです」「理不尽な命令に右翼も左翼もありません。死に物狂いの訓練をしていたベテランパイロットに、ただただキャンペーンのために体当たりを命ずるとするのは、右翼的な愛国心情とは全然違います」「（中略）というようなことを、僕はサヨクが大嫌いで、アジア・太平洋戦争を大東亜戦争と呼ぶ人達にも知ってもらいたいと思いました」

そうだったんですね。ともあれ、敗戦後73年を迎えるこの夏に是非お勧めしたいと思う。(H)



## 2018年度『人権セミナー』

## 第3回「小説『火垂るの墓』の舞台を歩く」

■講師：辻川敦さん（尼崎市立地域研究史料館）

■日時：2018年9月15日（土）14：00～16：00

■集合場所：阪神石屋川駅 ■解散場所：JR六甲道駅

■参加資料代：1000円 ※事前申し込みの上、当日現金でお支払いください。

フィールド  
ワーク

戦争孤児の兄妹（清太と節子）の物語である『火垂るの墓』は、野坂昭如が1967年に発表した短編小説です。兄の清太は1945年9月、14歳のときに三ノ宮駅構内で亡くなりますが、原作者の野坂も当時14歳であり、空襲に遭い、その後妹を亡くすなど、共通する点が多くあります。『火垂るの墓』は、野坂のそういった実体験を反映してはいるものの、2人の境遇には異なる点も多く、フィクションの要素も強い作品です。

1988年には、スタジオジブリの高畑勲監督によりアニメ映画化され、多くの人を知る作品になっています。野坂も高畑も、単に反戦をテーマとしたお涙頂戴のかわいそうな犠牲者の物語ではないと言っています。しかし、制作側の意図を超えて、戦争の悲惨さを強く訴える作品、反戦をテーマにした作品として、多くの人に受け止められています。

第3回セミナーは、『火垂るの墓』の舞台、清太と妹の節子が住んでいた（実際に野坂が住んでいた）御影町付近（現神戸市東灘区）を歩く予定です。講師としてご案内いただくのは、「火垂るの墓を歩く会」を毎夏開いている、尼崎市立地域研究史料館の辻川敦さんです。

第4回「受刑者の人権  
（神戸刑務所・ひょうご矯正展見学）」

■日時：10月13日（土）11：00～15：00頃

■講師：石元清英さん（ひょうご部落解放・人権  
研究所所長／関西大学教授）

■集合：JR西明石駅（予定）

■解散：神戸刑務所

■参加資料代：1000円

【事前予約制】

フィールド  
ワーク

第5回「人権とは何か

—『世界人権宣言』から70年を迎えて—

■日時：2019年1月26日（土）14：00～16：00

■講師：阿久澤麻理子さん（大阪市立大学教授）

■場所：のじぎく会館（204号室）

第6回シンポジウム

「血筋？土地？部落民とは誰なのか」

■日時：2019年3月9日（土）14：00～16：00

■講師：住田一郎さん（部落解放同盟住吉支部員）

石元清英さんほか

■場所：のじぎく会館（ふれあいルーム）

○講師、会場等は決定次第HP等でお知らせします。

○申込・問合せは研究所まで（078-252-8280）お願いします。

## 事務局から

- 研究所のすぐ前にコンクリートで覆われた崖があります。7月の豪雨の後、1週間にわたりコンクリートの割れ目から水が流れて出ていました。大丈夫でしょうか？（Ka）
- 「タクシー運転手～約束は海を越えて」、「焼肉ドラゴン」。映画を観ながら時代を追体験し、嗚咽する。（K）
- 地震、豪雨、台風と自然災害が続いています。自分の生活する地域等の自然災害のリスクがあるのかを正しく認識し、災害への備えなど普段からの準備が大切。実行したいと思います。（I）
- 日本の大部分は温帯と習った気がするが、亜熱帯に変わっているのではと思うこの頃。そもそも人間は暑さに耐えられる身体構造を持っていないのだそう。夏の過ごし方、変えていかないと。2年後の東京オリンピックもマジで何とかかなりませんかね。（H）
- ヴィッセル神戸にイニエスタがやってきました。特にサッカーファンでもないですが、スーパースターのプレーは見に行きたい♪（ひ）